

エンカウンター (ENCOUNTER)

第267号

2024年7月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (1)

キリスト教の学び方

われわれが英語を勉強するのは、少し前に英会話を毎朝、10年間やりましたが、7年目頃になったら、娘が「お父さんの発音が先生にちょっと似てきたなあ」と言って笑ったんです。娘は幸いに女子学院で初めから英会話は西洋人について習いましたものですから、調子が本当の英語の調子になっているんです。私は田舎の中学で、育ちましたものですから、もう毎朝やっておりましたが、7年目頃に先生の発音に似てきたと、娘が「お父さんの発音、先生に似てきた」と、言ってくれました。

そういうわけで、少なくとも私の発音は学ぶのに7年間かかった。そういうわけで、なかなか英語にならない。われわれのキリスト教も、自分ではキリスト教を勉強しているように思っていますけれども、我々のキリスト教の学び方というのは、非常に人間的な、この世的なキリスト教になっている。

ですから、聖書に与えられているところの力とか、平安というものは臨んで来ない。御利益がない。そうですから、お互いに何遍やってもやりすぎるということはない。特にパウロの書簡は、これはもう何十遍、何百遍、何千回やっても、やり過ぎるといいうことはありません。われわれの考えは、この世の考えになっている。

聖書は永遠の命を与えることを書いている

根本問題のついでに、この前の私のガラテヤ書大観について、少し申し上げたい。ガラテヤ書の最後の文句に、6章の最後の所に「わたしは十字架につけられて、十字架だけが私の信仰だ。十字架だけ、これだけを宣伝している」と、「十字架のあがないを宣伝しているので、生きているんだ」と、「世の中は私には十字架につけられているし、私は世の中に対して、十字架につけられている」と言っております。

これは少し分かりやすく言えば、この世は私に魅力はないし、私もまたこの世に魅力がないということです。そうですから、信者というものは、この世に魅力がない、そういうクリスチャンにならないといけません。そういうクリスチャンが本当に世の中のためになる、そういう人が本当に世の中、人類に益する人になる。

そういうことも聖書の言葉によってキリスト教を理解する。キリスト教というのは聖書の理解です。そうやって聖書は聖書によって理解する。そうですから、聖書をいくら勉強しても、勉強しすぎることではない。それは英語は英語であって勉強するのとよく似ている。

この点は、言葉はまずいですが、我々は生まれつき、この世が中心になっている。この世というものに興味があるんです。聖書は天国、永遠の命を与える、ということを書いている。聖書は、永遠の命のことを書いている。

聖書を学ぶ態度

私達はこの世のことで、この世で、安心を得たい。この世でいいことがしたい。この世で人に立派なこととして、この世で私たちのことを考えている。聖書とは全然違う。聖書は西を向いているし、我々は東を向いている。だから、私たちが西を向くためには、何百遍であっても繰り返さなければ、西を向かない。…

そうですから、繰り返し、繰り返し、学ぶ。それほど我々の心は地に着いている。自分に着いている。「『わしは目が見える』と言うから、お前は罪が残っているんだ。おまえはめくらなんだ。めくらのくせに、『俺は見える』と大きなことを言っているから、お前の罪は残っている」ということをイエス様はお教えになりましたが、我々はキリスト教を5年、10年やったら、ちょっとわかったような気になる。わしはクリスチャンだ、というような気分になっている。

だから、どうしても中学一年生が英語を学ぶ態度、小学生がいろはを学ぶ態度で聖書を学ぶということが、これが根本的に死ぬまで必要です。なぜか。我々は東を向いている。聖書は西を向いている。方角が違う。そうですから、われわれは学ぶ必要がある。謙遜になって、学ぶ必要がある。そういうことを第1、根本的に学びました。くどいようですけれども、もう一遍これが非常に大切です。

エペソ書大観

エペソ書といたら、どんな手紙であるかということ。エペソ書というのは、いろいろ学者の説がありますけれども、だいたいエペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ヘブル書とこの4つは、パウロが最後にローマにいて、ローマの牢獄につながれていた時に書いた書ということことになっている。

そして、エペソ教会というのは皆さんご存じの通り、パウロが第2回伝道旅行の時エペソで伝道して、第3回伝道旅行の時には3年間もここにおった。そして、彼が最後にエルサレムに上がる時に、近くの港から、エペソの長老を呼んで、劇的な別れをやった記述を使徒行伝と一緒に学びましたが、そういうふうのエペソ教会は、パウロと非常に関係深い教会なのです。その教会に宛てて書いた。…

日本語の聖書には「エペソにいる聖徒たちへ」と書いてあります。日本語の口語訳聖書にはエペソと付いてあります。要するにこれは、エペソにある教会に宛てたというよりは、このエペソという字がなかったら、その地方の教会に全部に、エペソとその辺の教会に宛てたというのが適当かも知れません。

これは特別に、ロマ書のように、あるいはガラテヤ書のように、あるいはコリント前後書のように、特別な目的があって書いた書物ではないのです。これは、パウロの信仰、聖書、彼の持っている信仰を知らせるために書い

た。パウロの晩年のもっとも高い信仰が現れている書物と、学者は皆そう
っております。これはそういうパウロの信仰を書き表した書物と見ていいの
であります。そういうパウロの最も高い標準の信仰が出ている。

エペソ書は、キリスト教を学ぶテキストとして誠に適当な書物

このキリスト教信仰、聖書を学ぶのに、一番初めにやはりこのエペソ書の如きパウロの書簡を学んだらいいと思います。一番初めに、何遍も言うことですが、英語を学ぶつもりで勉強せよと私は言うのですが、そのつもりで英語のテキストブック、教科書の第1巻はパウロの手紙、ロマ書が私はいいいと思います。ガラテヤ書でもいいし、エペソ書でもよろしい。要するにこのエペソ書がいいでしょう。これからキリスト教を学ぶ。そうするとキリスト教の西向きということがはっきりする。

福音書から入っておりましたら、東に向いたり、西に向いたり、文句が両方に解釈できますから、聖書を初めに学ぶのに福音書は不適當です。パウロの書簡から学んだらよろしい。ファースト・ブック、テキストブックはやっぱり一番初め、易しい根本的なものから学んだ方がいいですから、キリスト教のテキストブックとして、このエペソ書は、第1巻として誠に適当な書物であると思います。

そういう意味におきまして、「われわれはもう自分の中ではわかっている」「俺は信仰を分かっている。何遍も同じものを聞くのはいかん」というのでなしに、「私は何も知らない。私はキリスト教は何も分かっておらない」と、「これからキリスト教を学ぶんだ」というつもりで、これから一緒に学びましょう。私もそのつもりでおります。

イエス・キリストの贖いの恵み

「私達の父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなた方にあるように」(エペソ 1.2)

イエス・キリストの恵みというのは、これはイエス・キリストの贖いの恵みであります。平安というのは、イエスからその贖いの恵みを頂くと、我々は神の子とせられた信仰、復活の望みというのが出てきますから、それが平安です。ですので、この恵みと平安があなた方にあるように。

要するに、キリスト教を勉強するというのは、このキリストの恵み、この贖いということを勉強する。その恵みということが分かってきたら、神の子とされた信仰、復活の望みがいよいよわかってきたら、われわれに平安が臨む。

イエス・キリストは、「我、平安を汝らに残す。この平安は、この世が与えることはできない平安である」と言われた。ですので、この恵みと平安というのが、これがキリスト教の全体です。

われわれは神の恵みを頂いて、そして、われわれに言うべからざる平安、神の子とされた信仰、復活の望みと、そういうものがわれわれに満ち満ちてきたときに、我々に平安が与えられる。これがキリスト教の御利益です。

「生老病死の苦、漸をもって滅せしめ給う」

われわれは、心を検討してみたらよろしい。われわれに神の恵みが分かっているか、平安があるか。両方ともなかったら、ゼロ。それはクリスチャンではありません、求道者です。

われわれは恵みということを学ぶ。神の贖いを学ぶ。パウロの書簡というのは、恵みの展開するものです。神の恵み、贖い、これがキリスト教の全部です。これをどの程度われわれが分かっているか、ということがその人のキリスト教理解です、信仰です。それが分かるにつれて、平安が臨む。

私は古来日本で読まれている「観音経」というお経が一冊家にあったものですから、それを折々見ていたのですが、「生老病死の苦、漸をもって滅せしめ給う」と書いてある。生老病死、世の中の人間の、生きる、老いる、病氣、死ぬと、この4つの大きな苦しみがありますが、その苦しみは「漸をもって滅せしめたまう」。

私は内村先生が、「聖霊は徐々に降る」とおっしゃったが、私はどうも『観音経』の「生老病死の苦、漸をもって滅せしめ給う」と似ていると思う。漸次に、だんだん、なくなると書いてある、「観音経」には。そうですから、我々のこの生老病死の苦しみ、人生の苦しみというのは、なくなる。なくなる道がある。

日本仏教はキリスト教の旧約

私はキリスト教は仏教に負けないと思う。観世音菩薩がわれわれに与えることが出来るそのその恵みを、イエス・キリストが与えることが出来ないといはずはないと私は信じます。日本仏教はキリスト教の旧約と見てよろしい。私はそう思う。

われわれの人生の苦しみ、「漸をもって滅せしめたまう。」漸次になくなる。一度には治らんですよ、われわれの心が東を向いているのですから。我々が西向くにしたがって、治って来る。われわれが苦しい、悲しいと言ってバタバタやっているのは、東を向いているからです。東を向いていたら、この世にかじりついているから、悲しみ苦しみがある。

キリスト教は、宗教というものは、実益がありますよ。実益のないようなものは、やめたらよろしい。われわれは東を向いている。聖霊の助けによって西を向かせてもらおう。